

刹那消滅しつつ、愛着処であるから、持続力（記憶の働きと性質）を持つ。

「命根」は 1. [寿] 同じ状態を維持する力。①遺伝子？ ②衆同分。類の形成。

2. [煥] 体温。呼吸・消化吸收・代謝・循環。

3. [識] ①脳神経。②神経細胞。③白血球。

⑥ 生命とは個体としてのまとまり…分散しつつあるものは個体として自立していない

「四大縁起」地大…骨等堅い性質。水大…水分の性質。火大…体温維持の性質。

風大…呼吸・成長・動く性質。

* 禅問答…ミミズが切れて動くのはなぜか。答…風火（四大・生命構成要素）が分散しきれていないからだ。統一された固体から分離した部分にも生命はあるがそれは分散過程の生命であって、自立した生命ではない。

* このことは、部分的に「生命」であっても、捨てられる生命がある、ことが分かる。
「爪・髪の毛。精子、卵子。受精卵」は不要な生命である。（爪髪は36時間生きている。火葬の時は生きているが、誰も生きているとはいわない）

7、食物という外界をとりこんで自己を構成する能力。（四食証）

①段食（食物）、②触食（感覚による自己の養い）、③意思食（思いによる養い）、
④識食（認識により外界をとりこんで身心を養う）能力。

⑧、父母を縁として〔色／物質〕と〔識〕が合して命根となりカララに宿る（名色互縁証）

胎内五位 1. カララン…受精後7日間。凝滑。和合 2. アブドン…二週。泡。

3. ヘイシ…第三週。血肉。4. ガナ…第四週。堅肉。5. パサーカー…五週～出産。支節。

* 父母を縁として「色」と「識」が互縁になるというとき、①受精の互縁は第一段階であるが（試験管内では）母体との互縁はまだ成立せず、②着床で互縁が確実になるといえよう。

9、自己の生命への愛着から命あるものへの共感と慈悲心が働く（趣生体証）。

* 流産した母親がわが子と意識するか。それ以前に子として認識していないと、わが子とは思えない…という人もいる。

⑩、唯識学から見て生命の自立の時期を確定できるか。

イ、生命の発生から見て「阿頼耶識」は卵子・精子の段階からあり、それが〔受精の瞬間〕から自立活動が開始するが、より上位の「自立」は着床からともいえる。

ロ、しかし、14日までの「胚」の段階は「万能細胞」の段階であるということと、それ以後との違いは、個体になっているかどうかの違いである。

* 6の*印の「四大縁起」の未散のゆえに、個体としては分散しつつあるがその部分的生命を維持している生命は「阿頼耶識」の消滅への過程にある状態と言える。すると阿頼耶識を持つ生命活動が必ず自立した生命とは言えないことになる。

ハ、このことから、生命とは多くの条件の「縁起」であるが、同時にその縁起をまとめる「命根」の能力により「自立」したものということができる。

自立とは、①受精（試験官の中でも）か、②着床からか、③体外での一纏まりの個体なった14日目、④心臓と脳の出現する7週目ころ、⑤母体から分離しても生命を維